

再び新聞さんのウクライナ戦争論について

大谷美芳(2022.05.12)

5/10 東京ルネ研報告の「戦争の性格と我々の立場」の中心は以下、特に④でしょう。

- ①ロシアの侵略戦争であり許すことはできない。
- ③……本質的に国家資本主義的ロシアと新自由主義的欧米資本主義の……勢力争い……。我々はどちらにもくみしない。
- ④しかしながら……ウクライナ人民がロシア(帝国主義)の侵略に対して闘うのは正当なものであり、支持しなければならない。だが、その闘いのヘゲモニーが……保守派(あるいは反動派)と“共闘”したとしても、独自の立場(反欧米=NATO、反オルガルヒ=ゼレンスキー)が貫かれる度合いによって真の人民的=民族的闘いとなることを確認し、そのような勢力が成長拡大することを支持しなければならない。

(1)ウクライナのプロレタリア階級と共産主義者はどう闘争するか？

③からは、ゼレンスキー政権を打倒する内乱。これはない。③が間違っています。①と④からは、反侵略・祖国防衛戦争をブルジョア階級=ゼレンスキー政権と共闘して戦う。彼らはきっこう闘っているでしょう。①と③は、4/9関西ルネ研報告と同一だが、もともと矛盾しています。今回、新しく④が付け加えられて、その矛盾が拡大している。

祖国防衛は、民族解放=ブルジョア革命と同じ。ブルジョア階級と連合する中で、プロレタリア階級は独自性をもって闘い、勝利の後、連続的に社会主義革命へ前進する。そういうヘゲモニーを形成する。国際共産主義運動の経験とマルクス・レーニン主義の理論ではこうなる。実際、④はそういう考えではないでしょうか。

(2)プロレタリア階級の独自の要求を考えてみる 根本問題=国家の分野では人民民主主義

ベトナムでも中国でもロシアでもブルジョア革命に直面し、プロレタリア階級は、ブルジョア階級独裁ではなく、人民民主主義独裁を実現した(ロシアは「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁」でNEPが実質それ)。これが社会主義革命に連続的に前進する条件であった(実は全て失敗し官僚制国家資本主義化した但それは別の問題)。

ただ、これはプロレタリア階級のヘゲモニーが必要であり、ウクライナの現状では実現できず、ブルジョア階級独裁が続くだろう。それでも、これを追求することは、社会主義的ヘゲモニー形成のテコとなる。実質はブルジョア階級独裁に対する民主化になる。

1.例えば安全保障の分野では NATO反対と全人民の武装

NATOには加盟も参戦も反対し、ロシアの侵略には全人民の武装で戦う。民主主義の拡大になり、コンミュン・ソヴィエトにつながる。常備軍反対は現状では非現実的。

NATO加盟に進むフィンランドやスウェーデンのプロレタリア階級も同じ要求になる。

2.例えば民族問題では 「ミンスク合意」反対と多民族共生国家

「合意」はクリミア併合を不問にし、ロシアに独仏も加わってウクライナの独立と主権に帝国主義が干渉した。プロレタリア階級は反対すべきである。

クリミアとドンバスの民族問題は短期には解決しない(短期にやれば大国頼み)。長期になる。ウクライナとロシアのプロレタリア階級が連帯し、両国に多民族共生国家を実現する。1.自決権だけでなく、2.自治、3.抑圧民族が被抑圧民族に譲歩、これも原則にする。

ユーゴスラビア崩壊後のバルカンでも、パレスチナやミャンマーでも同じ問題。中国も。

3.戦争に直接関係ないが 経済の分野ではオリガルヒの民主的統制

人民が独占資本を統制する。国有化(国家資本主義)も考えられる。

(おわり)

.....

「③と④は矛盾しません。③からゼレンスキー打倒→内乱が結果し④と矛盾するという指摘ですが、そうではありません。たとえば中国ではいずれ(本質的には)蒋介石を打倒対象だと考えていても当面の敵たる日帝に対して“共闘”したこういうことはチトーにしる、フランスレジスタンスでもあったことです。ウクライナの左派は忸怩たる思いでいずれゼレンスキーを打倒してやるという思いながら“共闘”している“はず”だと思っています。要するに本質と当面の戦術は乖離することがありそこを巧みにやる能力があることが左翼には重要なことで、毛やチトーはそれをやったということです。一年ほど前にチトーのことを少し調べたことがあります、たいしたやつだと思いました。—理論的には右腕のカルデリも。」(新開純也 5・13)

.....

「問題は、『米国・西欧とロシアの帝国主義間対立』という規定をする個人や組織は、ウクライナ人民の戦争を支持しないということです。世界的に米欧日と中口の覇権闘争でも、ロシアとウクライナの戦争は侵略と反侵略です。そういう認識がないと、ウクライナ人民支持は出てきません。

仮に第二次大戦が帝国主義間戦争であるとしても、日中戦争は侵略と反侵略・祖国防衛です。中国側の戦争は、たとえ共産党軍が存在せず、国民党軍だけであっても、支持されるべきものであった、と考えます。」(高原浩之 5・13)